

合同記念礼拝の朝を迎えました。敬愛する、清水知子姉、室昭子姉の納骨式もあります。ご遺族に、上よりの慰めと平安がありますようにと、心よりお祈り申し上げます。

确实だと、と思うものが失われる時、私たちの心は打ちのめされた気持ちになります。当たり前だと思うことができなくなる時、どうしようもない焦りを感じたりもします。

お正月や、夏の帰省など、当たり前にしてきた往来が途絶え、感染症対策も、二年、三年、と続きました。しかし、知らないうちに亡くなられた方の訃報を聞くと、取り返しのつかないことになった、という落胆と焦りのような気持ちになります。

教会でも、竹岡淳志兄や、金沢あや姉のことを思う時、牧師として務めを果たせなかった申し訳なさで胸がいっぱいになります。山下敏子姉は、クリスマスに102歳の地上の生涯を終えて天に帰られましたが、私自身が新型コロナウイルス陽性者となり、臨終に馳せ参ることがかないませんでした。

しかし、肉体は消え失せても、その人との記憶は、見えない形で心に残っています。

「いつまでも残るものは、信仰と、希望と、愛です。その中で最も大いなるものは愛です。」(1コリント13:13)と聖書は語っています。亡き人を思う時、その人から与えられた、優しさや、励ましの言葉、信仰の道といった、かたちのないものは、最高の贈り物となって、いつまでも残り、消えることはありません。

今朝の聖書の箇所は、永遠の愛について語っています。それは、人間という限られた存在を超えた、神の愛について語っているのです。

神の愛を、見える形で証明することはできません。むしろ世の中には、その存在を否定するかのような、痛ましい出来事が起こります。岩淵まことさんという、クリスチャンのシンガーは、かつて小学一年生の娘さんを、手術と闘病の末に、失いました。「幼い子供に先に死なれることは、今でも整合性がとれない出来事。けれども、その中で、娘にイエス様が一緒にいてくださることを感じる特別な経験があり、闘病を目の当たりにする中で、イエス様を十字架にかけてまで、世を愛する父なる神の愛に思いを向ける歌が生まれた」と語っています。

イエス様は、喜びだけでなく、悲しさや苦しみを通して、信仰と希望と愛を、わたしたちに与えてくださいます。自分でどうしようもなくなってしまう気持ちになる時、それは、自分の誇りや、苛立ち、恨みなどが、失われるチャンスになるかもしれません。そして神の寛容さ、情け深さ、真理の喜びに、出会う時になるチャンスにもなり得るのです。

神の愛が、わたしにも与えられていると、信じてみようではありませんか。失われることのない、この愛に心が満たされるとき、今は、打ちひしがれている真っ暗な心にも、朝やけのような穏やかな光が、再び差し込んで、新たな希望が生まれることでしょう。